

アン・ブラッドストリートの“Contemplations”を読む

平野 溫美

(平成8年4月30日受理)

“Ann Bradstreet’s ‘Contemplations’” —Her Spiritual Autobiography—

Harumi HIRANO

Abstract

Most readers agree that Ann Bradstreet's "Contemplations" is the best and the most skillful of her longer poems. Not only that, it is also favored as the most significant and appealing in all her work. There is a disagreement, however, in the contemporary critical opinion as to the precise nature of the poem. Those who stress her Puritanism find "Contemplations" a typical poem of religious meditation in the seventeenth century. Others point to another kind of sensibility: a romantic view of nature close to that of English Romanticism. The present paper attempts to reveal the patterns of form of the poem and the meaning, and concludes that "Contemplations" was written precisely in the traditional pattern of meditation, the main theme being centered upon "mortality" and "immortality". A closer reading shows that although the meditation includes her usual development from "what she feels" to "what she should feel", the conflict of choice is not a painful one nor does the latter give a forced impression. The first part of the poem is devoted to the kind of genuine delight of nature in which we can assume an anticipation of the Romantic poets. Yet, after the rather sudden realization of the poet of the mortality of nature and immortality of man, nature is viewed and expressed in terms of emblematic literature. The purpose of this paper is to stress that these three aspects of nature—nature as a genuine delight, its mortality, and nature as an emblem of God's glory—are the necessary steps of the poet in her quest for faith and to sing God's praises. "Contemplations" is the singular expression of religious conversion and also the spiritual autobiography of Ann Bradstreet as a poet.

I

Ann Bradstreet(1612-72)が“Contemplations”（「瞑想」）を書いたのは1664年ないし65年と推測されるが、65年8月の日付のある“In memory of my dear grand-child Elizabeth Bradstreet, who deceased August, 1665 being a year and half old”（「愛しい孫娘エリザベスによせて」）より前であると推測される。それはこの世の事象と、神の恩寵を得た永遠の命とのバランスが、両作品で微妙に異なるからである。

アン・ブラッドストリートは翌1666年、家が焼け落ちる不幸に見舞われ、またその三年後にはふたたび幼い孫を二人も亡くしている。植民地に来て以来病気がちの苦労の絶えない月日であったのは確かなのだが、¹この時期は特に不幸が重なっているのが目立つ。その度にこの世の生と、永遠の喜びと確かに保証されたあの世との心の調整を行なう作品を書き記しているが、「愛しい孫娘エリザベスによせて」また“Upon the burning of our house”（「わが家が焼け落ちて」）においては、この世での悲しみ、また喪失の嘆きの方が、あの世の祝福された姿への期待と確信よりも鮮烈に伝わってくるからである。対する“Contemplations”は、それらの作品と比較すると、題名が暗示するように、私生活から少し距離を置いた、客観的な思考の流れがある。この作品が、数々の苦しみの重みの手前で書かれたと推測するのはそういう理由からである。

例え、「愛しい孫娘エリザベスによせて」というエレジーは二連から成るが、詩人は、一才半で「永遠に運び去られ」た孫娘に、最後の別れを惜しみつつ何度も呼びかけ、そして言う、「幸いなる子、一体どうしてその運命を私が嘆き悲しむでしょうか／また、こんなに早く生涯が終ることに吐息するでしょうか」。読者にはこの段階では疑問文であり、詩人がなぜ悲しむか、なぜ吐息するのかの答えを求めるメッセージとなっている。しかし、その後「だって、あなたは永久の座に落ち着いたのだから」という理由を示す節が続くことによって、文全体ははっきりと修辞的疑問文へと反転し、「私が嘆くことはありえない、吐息することはありえない」という強い否定となる。すなわちここからは二重のメッセージが発せられているのである。明らかに詩人は嘆き、吐息した、しかし詩人は嘆いてはいけないし、また吐息してはいけない。なぜなら、幼き子は祝福され、選ばれて神のみもとへ行ったのだからである。二連も同様で、受け入れ難い不自然な出来事（でも植えたばかりの苗が根こそぎされ／ほころんだばかりのつぼみが、こんなに短命なのは）が、何の説明もなく突然に故意に執行されることに対する納得できない詩人の感情と、しかもそれを越えた絶対的神の確認（ただただ自然と運命を司る神の御手によるのみ）という二つのメッセージが並ぶ。幼い子の死と「不自然な」自然現象は、あたかも神の惡意の結果ではなかろうかと読むこともできる。

孫娘の死の後に“Contemplations”が着想されたならば、エリザベスへのエレジーが到達できなかった、神への帰依の過程がなんらかの痕跡を残したであろうと思うのである。“Contemplations”は、緊迫した事件という要因がもたらす動搖から自由な、作者の基本的思考の方向、この地上で生きることと永遠の命への確信について知ることができる。アン・ブラッドストリートの作品のうち比較的長い詩の中で“Contemplations”が最良であるとは批評家の一致するところである。また単に長い詩だけでなく、彼女の全作品中で“Contemplations”は最も出来上がりのよい、印象深い作品とさえ言われることが多いのも、先に述べた理由によるのではなかろうか。

とはいって、詩の解釈には議論の分かれどころがあり、それに関しては、Alvin H. Rosenfeldが、Ann StanfordとJosephine Piercyのふたりの批評を挙げて、大きく異なるふたつの批評の傾向を紹介しているので、これを参考にしてみる。²すなわちスタンフォードはこの作品を17世紀の瞑想詩の伝統の枠内で理解し、詩の意味を宗教上の瞑想の形式と内容から把握し、そのまま17世紀の表象文学との類似を指摘する。結論としては“Contemplations”は基本的に自然詩(a nature poem)ではなく、瞑想形式(meditative form)に従った詩と読める」と主張する。一方のピアシーは、この作品は詩人の「自然における純粋な喜び」から引き出され、それを表現したものだという意見で、アン・ブラッドストリートは基本的にはロマン派的詩人であると主張。そして作品の中のロマンティックな点を強調する。

ローズンフェルド自身はピアシーの流れで“Contemplations”を評価する。この詩は非常に複雑

な構成をしているが、詩の中に見いだされる、ある一定の型を挙げてみせる。例えば季節のメタファー、朝夕という一日のサイクルに、季節で表わされる一年のサイクル、そして木から太陽、川、小鳥、石へと至る自然のイメージの進行。叙述や劇的時間がはっきりと切り替えられていること。古典の引用と聖書の引用との顕著な対照。さまざまな叙情的挽歌的様式にそれを包括する叙述形式等である。それらは詩を豊かにし、ある統一を与えていたとした上で、作品にははっきりとシェリーやキーツの調べがあると指摘し、代表的なくだりを二箇所挙げて比較の上、趣旨を明確にする。ひとつは順調な地上の生活に満足することへの警告めいた第32連の後半、

But sad affliction comes & makes him see

Here's neither honour, wealth, nor safety ;

Only above is found all with security.³

ところが悲しい不幸が訪れると分かるのだ

ここには名譽も富も安心もないことが、

すべて保証されてあるのは天においてのみ

そして、太陽を歌った第6連の後半、

Thy presence makes it day, thy absence night,

Quaternal Seasons caused by thy might :

Hail Creature, full of sweetness, beauty, & delight, (6)

汝が在るのは昼、不在は夜

四季は汝の優れた勢いによって生じるもの

幸いあれ、太陽よ、満ちあふれる優しさ、美しさ、歓び

両方を比べると、後者の、確かにシェリーの詩のなかに見いだされる美しさや想像力の豊かさが心に響く。そこからローズンフェルドは次のように結論を導く。

これらふたつの詩句の良さを、アン・プラッドストリートの「感覚による認識」(the feeling of knowledge)で量ると、たとえ彼女がピューリタン信仰の共同体では有名な成員であったとしても、詩人としてはキリストよりもポイボス、太陽の崇拜者であった。⁴

アン・プラッドストリートが最も初期の開拓者であって、そこに現れた最初の詩人であることから、彼女は研究者の熱い思いをかき立てる。信仰の自由を求めたピルグリム・ファーザースが開拓と建国の神話となるように、初の女性の詩人には開拓を通して生まれる新しい感覚、想像力、強いては新大陸アメリカ独自の文学の芽となるものを求めて彼女の作品を読もうとするのも理解できる。「このように感じた」のではなく、清教徒として「このように感じなければならない」時代にあって、高らかに自然をうたい、イギリス・ロマン派詩人たちを一世紀半も先取りした豊かな感受性とその表現という理解は、研究者自身には非常に魅力的であり、アン・プラッドストリートに新しい光を当てるこことを意味する。⁵しかしながら、彼女にとって自然とはそのように開かれたものであったろうかという疑問が湧く。“Contemplations”を神への帰依への確信に至るための17世紀の瞑想詩に閉じこめることに異論があったにしても、この詩の構成と意味はやはり、時

代に盛んだった瞑想詩であること、アン・プラッドストリートの自然はロマン派とは決定的な点で同じではなく、その解説に重要なのは“mortal”である自然の美しさを詠いつつ、同時に“immortal”の世界のエンブレムとしての自然を詩人は求めていることの二重性に気づく事であること等を主張するのが、本稿の目的である。次に“mortal”と“immortal”的間に何が起きたか、また表現と内容において詩人の思いはどちらに具体性と説得力があるかを、できれば見ていきたい。結論としてはこの作品は Helen Saltman の言葉を借りると、詩人の「精神の自叙伝」となっていることを述べるつもりである。⁶

私が始めるように、私たちはいつも、距離を感じた、客観的な視点から流れかかる。この作品が、歴史の苦しみの塊の中、手削で書かれたとされる。II

例えば、「愛しい孫娘ユリイアスによせて」⁷などとえ“Contemplations”が自然を詠った作品であるとしても、アン・プラッドストリートが当時の瞑想詩の作詞法の形式と無関係であったわけではない。彼女が同時代の詩人たちの影響を強く受けていることも明かで、Kenneth A Requa は“Contemplations”が1605年に英語に翻訳された Bartas の *Divine Weekes* に多くの点で類似していることを指摘する。⁷ またアン・プラッドストリートが詩におけるエンブレムの使い方を知っていたことは“Contemplations”を理解する上で重要である。例えば議論が分かれることもあるが、詩人は直接に自然に対して自らをとけこませ、いわば写実的に観賞したのかどうか、反対に作品は当初から全体として“emblem literature”として構想されたものであるのかどうかに関係するからである。ともかくもアン・プラッドストリートがエンブレムを意識したことは、彼女自身がこの言葉を詩の中で使っていること(Thou emblem true of what I count the best, (23)) また“Meditation”40番はこの言葉を含む美しい文で始まるところからも明確である。

The spring is a lively emblem of the resurrection, after a long winter we see the leavlesse trees and dry stocks (at the approach of the Sun) to resume their former vigor and beauty in a more ample manner than what they lost in the Autumn...⁸

春は復活を表わす活力あるエンブレムです。長い冬を経て、葉を落とした木、乾いた茎が、(太陽の接近につれて) 以前の精力と美しさを、秋で失ったものよりもずっと豊かにたっぷりと、取り戻すのがわかるのです。

ここで17世紀の瞑想(meditation あるいは contemplation)とエンブレムについてまとめておきたい。⁹ 当時のキリスト教徒はそれぞれの教会による教えに従い、自分の心が神の御心にかなっているかを吟味した。その方法の中で、精神的な支えとして有効であると一般的に行なわれたのが、瞑想, meditation である。meditation と contemplation の相違については、17世紀では両者は大きな違いではなく、時には同一に使われていたようである。厳密に言えば、meditation は「制度としての精神鍛錬実習あるいは実習過程」であり、カトリックを中心にヨーロッパで広く行なわれたものである。一方ピューリタンにとっては meditation や contemplation は、制度としてはっきりしたものではなく、宗教上の諸問題を真剣に熟考する、ということを意味したのである。しかしながらアン・プラッドストリートの“contemplations”については、必ずしもピューリタンの考え方にはだわらず、「制度的な meditation の方法や実践に馴染んでいる詩人一般やり方を、ある程度反映している」とスタンフォードは述べる。

Meditationを行う方法というのは、人の精神的な力であるところの、記憶あるいは想像、理解あるいは根拠、情念および意志から成立し、それらを総動員することによる。まず、記憶の中から瞑想の主題となるものを想起し定めると、次に想像によって、その主題を生き生きと思い描く。例えば聖書の中の物語とか、神の顯現(incarnation)や受難、それともまったくの想像の場面などである。次の理解というのは、思い描かれた光景と瞑想者の精神の状況との間にある、類似あるいは比較を引き出すことである。その光景は神に関する聖なる出来事についての感情と結び付くこともある。最後の意志とは、瞑想者を徳のある行為や感情へ動かすことで、祈りの形、または中会(colloquy)の形で表されたりするが、瞑想もそこで締めくくられる。

ピューリタンと瞑想との結び付きについてスタンフォードは、牧師の Richard Baxter が1650年にその著書の *The Saints Everlasting Rest* の中でカトリックと国教会の瞑想方法を、“Meditation”とか“heavenly contemplation”という名称でピューリタンに取り入れたことを紹介している。それによると、被造物も瞑想の対象とすることができます、17世紀後半の英語の瞑想詩の中ではますます多く使われるようになり、神の顯現(incarnation)にとって替わるようになったのである。被造物を瞑想することの意義については、バックスラーは次のように述べている。

また他にわれわれの五感を役立たせる道があるのです。それは、感覚が認知する対象物を信仰の対象物になぞらえる方法です。感覚に対しその媒体を出さしめる、そこからわれわれは超絶的価値のある栄光に達することができるのです。ちょうど劣るものから偉大な事柄へと移行するように、五感で認知できる喜びについて議論することから、優れた喜びについて議論するように移行するのです…¹⁰

この前提としては被造物はすべて神がお造りになったものであること、すなわち、この世のものは神の存在と力を示す証拠であるとの認識がある。神自身は目に見えないけれど、被造物の存在そのものが神の存在であり、またそのことの象徴でもあるわけである。

先ほどの瞑想にもどると、記憶によって定められる光景が、神が創造されたこの世のもので置き替えられることになると、詩はなんらかの被造物の描写から始まることを意味する。そこから詩は、この被造物についてのさまざまな真実の理解へと発展し、締めくくりは神と被造物についてあるいは被造物そのものについてということになる。詩の設定がそのように、記憶の中から呼び起こされる信仰上の出来事ではなく、被造物および対象物が置かれてある自然の光景と、その観察と描写となると、瞑想詩は制度としての瞑想(meditation)はもちろん、17世紀に盛んだった表象文学(emblematic literature)とも密接につながっていく。

エンブレムについてだが、やはり、そのよって来る所は、この世のものはすべて神の栄光を表す表象であるとの考え方である。17世紀にヨーロッパではエンブレムの本が広く流布し、それによるとエンブレムとは絵、それに付随した例えあるいは類似、そこから引き出されるモラルが一体になったものである。となると、これは主題の描写、議論、意志で構成される瞑想および瞑想詩と重なっていくことはもちろんである。心を神にかなうようにする鍛錬として瞑想および瞑想詩があったのであるから、エンブレムは瞑想のための一つの方法として有益となる。

“contemplations”に戻って、全33連のこの詩を最初に読むと、まず作品に現われる自然の対象物が、紅葉、桜の木、太陽、バッタ、こおろぎ、魚、鳥、川と、次々と移り変わり、詩人の対象に迫るそのあり方も一定ではなく、非常に散漫に風景が変化して行くように思える。しかしながら、最初の9連がひとつのまとまりを成していること、次に第10連からははっきりと異なった展

開を見せ、第21連からはさらに別のまとまりとなって、自然の風物に注意が向けられることに気付くと、この作品は極めて意識的に構成が考えられていることが解るのである。瞑想詩の形式の背景から“Contemplation”を見直すと、第1連で詩人は公式通り、ある光景を想起することから始まるのが分かる。選んだ主題は自然、そして最大の間心事は太陽であったと読める。プラッドストリートが詩の主題として選ぶのは、例えば夫を含む家族のこと、孫の死、家の喪失、肉体と心などさまざまである。主題とはいわば自分に科する課題であって、その課題の内容である出来事によって信仰を確かめ、心を鍛えていく。課題が大きければ大きいほど、乗り越えていく強さが試される。批評する者は、詩人の感情の深さが教義に対しどれほど拮抗し、どれほど昇華されているかを問うことにもなる。読む者の詩人に対する、ある種の緊張感を伴った共感が生まれて来る所以はここではないかと思われる。

最初の部分が後のロマン派との類似が指摘されるところとなるように、詩人の太陽へのあこがれは、詩人の最終的にたどり着くべき神、“My great Creator”と拮抗し、自然そのものへの賛歌の陰で、神への賛歌がその方法を見失っているかのような印象さえある。第1連で太陽は、ポイボス (“Phoebus”) とギリシャ神話の太陽神、厳密には異教の神の名で現われる。

Sometime now past in the Autumnal Tide,
When Phoebus wanted but one hour to bed,
The trees all richly clad, yet void of pride,
Were gilded o're by his rich golden head.
Their leaves & fruits seem'd painted, but was true
Of green, of red, of yellow, mixed hew,
Rapt were my sences at this delectable view. (1)
しばらく前のある秋の季節のころ
ポイボスがしとねへと傾くまでは、あとひととき
木々は華美に装い、しかも奢りなく
かの黄金の頭によって金色に飾られた
木の葉や実は、まるでペンキを塗ったかの如く
でも緑、赤、黄色、混合した色調はまことの色
喜ばしいこの光景に、私の心は奪われた

色彩豊かな美しい風景は本物のニューイングランドのものでないのかもしれない。¹¹ 詩人はある特定の風景に心引かれたのではなく、詩の目的に叶う姿の自然を心に描いたともいえる。色とりどりの秋の紅葉を描く詩人は、ちょうど一面に咲き乱れた金色の水仙を見たワーズワースと同じく、その場を去って思い出の中で捉えられた感動を言葉にするのだが、ワーズワースの自然の存在へのそのままの信頼と持続する歎びはここでは警戒しなければならない。太陽に照らされた木の表面は「金色に飾られた」 (Were gilded o'er) のであって、自分の色彩なのではない。また紅葉や木の実の鮮やかな色彩は「まるでペンキを塗ったかの如く」 であって、直後に詩人は「まことの色」 であることを付け足すのである。そしてワーズワースの心が陽気となり、後に喜びで満たされたように、木々の美しさに詩人の「心は奪われた」 (Rapt were my sences) のであった。ロマン派の詩人たちにとって心が奪われるとは、心が極度に高揚することを意味するだろうし、いずれそれは自分を裏切ることになる一時的身心の状況と判断することはないだろう。しかしプラ

ッドストリートにとっては、文字通り、何かの力によって奪われた状態なのである。詩人はこれ以上に望むものがあることさえ「わからない」状況に陥っている。第2連でこの美しい世界を造った神を讃える言葉が発せられるが、明らかに軽く、通りいっしんでしかない。注目すべきは、地上と天上は峻別すべきものであり、二者は相対立する世界であるにもかかわらず、この世を安易に天上と結びつけところである。詩人はこうしていくつか傲慢という陥せいを設けておく。

Sure he is goodness, wisdom, glory, light,

That hath this under world so richly dight :

More Heaven then Earth was here, no winter & no night. (2)

もちろん、神は善なるもの、知恵、栄光、輝き

そしてこの世をこのように豊かに飾られた

ここは地上よりむしろ、冬なく夜なき天上に近かった

詩人の眼は次に堂々と立ちそびえている樺の木に向けられるが、また再び太陽に注意は注がれる。詩人の眼をたどると、森の中、自分と同じ高さの周囲から、視線を上げて頭上亭亭と立っている木の先、それから太陽へとちょうど自分を中心として、自然が同心円上に垂直に存在する。その見上げる最頂に、輝く太陽がある。詩人はそれを讃え、神に対するのに近い賛辞を送る。

The more I look'd, the more I grew amaz'd,

And softly said, What glory's like to thee?

Soul of this world, this Universe's Eye,

No wonder, some made thee a Deity ;

Had I not better known, (alas) the same had I. (4)

見つめれば、見つめるほど私は驚嘆した

そして、そっと呟く「どんな光輝が汝に匹敵するだろう」

この世の魂、この世の眼

汝を神とする人々がいるのも当然のこと

もっとよく知らなかつたら、私もそうだつたろうに

自然界の最も偉大なる存在として太陽が言及の中心になるや、詩人はさらに自然に対し密接になり、第1連の硬さはすっかり消失してしまう。太陽の輝き、その地上の生き物を蘇えらせ、死から再生させる力、一日を造り、一年を造り、また昼と夜を決め、四季を織りなすその大いなる熱、勢い、やさしさ、美しさ、歓びなど、詩人の太陽への賞賛は高まっていく。最初ギリシャ神話の太陽の名ポイボスで呼びかけた詩人は、次には詩編（19：4—5）に出てくる「花婿」になぞらえ（花婿のごとく祝いの部屋から急ぎいでくると／力強い男性のごとく競い走るを楽しみ／）、天空を渡り、自然に生命を与える存在としての太陽は、ここでは活力にあふれた強い男性像のイメージで貫かれる。大地に熱を注ぎ、生きとし生けるものを蘇らせ、その命を「多産な自然の暗い子宮」に投げ入れる。ここで、天の太陽と地は、一対の完全な世界を形成するかに見える。太陽の栄光は眼に見えるもの、温度として感じるもの、甦えらせる力によって、事実は誰にでも分かっていることなのである。

All the mortals here the feeling knowledg hath. (6)

地上の命あるもの全て感覚の認識を持てり

「この世の魂、この世の眼」と呼び掛ける太陽を、詩人は神のエンブレムとしているのではない。太陽は神そのものであるとする人々がいることの証言とその事実を是認することで、太陽に象徴される自然に、神が約束する永世が宿るという印象を故意に与えようとしているかのようだ。プラッドストリートがロマン派に最も近づいたところがここなのである。作品がここで終るのならば、これは立派な「自然の歌」であろう。

ところが、第8、9連で事態は一変する。詩人は自然を通じて神を讃える歌を歌うことができないことに気づく。すなわちロマン派の自然に自分を任せることは不可能なのである。一見、神への帰依に非常に近づいているという印象を片方で与え、しかもそれはまやかしであって、自然をそのように信頼することは、本来の人間の置かれた状況を見えなくさせてしまうことを示すためである。

Silent alone, where none or saw, or heard,

In pathless paths I lead my wandring feet,

My humble Eyes to lofty Skyes I rear'd

To sing some Song... (8)

I heard the merry grashopper then sing,

Whilst I as mute, can warble forth no higher layes. (9)

黙してただ一人、見る者もなく、聞く者もなく

道なき道を私はさまよい歩く

つまらぬ私の両眼は高き空を見上げ

ある歌を歌おうと

その時、陽気なバッタが歌うのを聞いた

私といえば黙したまま、それ以上高く歌うことができない

神を讃える歌が歌えない孤独な詩人は、「わが家が焼けおちて」("Upon the burning of our house")における信仰の危機、すなわち、この世の生活のすべてを象徴する「家」の喪失から生じた「空しさ」にとらわれた状態に通ずるのではあるまいか。しかも、家の消失は衝撃的な方法で、詩人にこの世の空しさと、それに対する神の国における永遠性の確認へと至らせたが、豊かな自然が詩人にもたらすのはこの世における天上らしさという、一種のまどわしであり、傲慢である。詩人の視線は、「高き空」から足元のバッタへと下がっていく。太陽と地上の生き物の死と再生のドラマを、人の堕落と神による救済の象徴とするわけにはいかないのである。

第10連から始まる聖書の世界は詩人に人類の歴史に再び向き合せ、それを引き継いで来たことの確認の所作である。堕落と救済の一対に行行為は、豊かな美しい自然の鑑賞とは無縁のものであり、まずは堕落の暗闇を引き受けるところから始まるからである。この理解は、太陽を中心と

した自然の認識方法と異なり、想像による認識となる。

When present times look back to Ages past,
 And men in being fancy those are dead,
 It makes things gone perpetually to last,
 And calls back monethes and years that long since fled
 It makes a man more aged in conceit,
 Then was Methuselah, or's grand-sire great :
 While of their persons & their acts his mind doth treat. (10)
 現在の時からずっと昔を返り
 すでに亡き人々を想像すると
 過ぎ去った物事が常しなえに続きます
 飛んでいった年月を呼び戻す
 さすれば人はメトセラ、その祖父ヤレドよりも
 思考においては更に年老い
 心は彼らの人柄や為した事を思う

想像する力によって、人は数百年の歳月を生き、さまざまな人物になりうる。詩人はアダムとなり、イヴとなり、そしてカインヒアベルにもなる。詩人は特に最初の殺人者カインの心中深く入り込み、その恐怖、絶望、悲しみ、孤独を思う。この事件は同時に「処女なる大地」が殺人で流された血を以後、「飽きるほど」飲み込む歴史の最初であったと詩人は言う。最初の人の罪はこうして人類すべてに受け継がれ今に至り、自然もまたこの罪による汚れを深く大地に染み込ませてしまった。その上、人の生はその内容、重さについて、遠く過ぎ去った時代の人々と比べるべくもなく短く、乏しく、堕落も同質でなく、さらに深まっていることを暗示する。「冬なく夜なき天上に近かった」と自然を無条件に讃えた詩人は今は暗闇の人の心に行き着く。

So unawares comes on perpetual night, (17)
 気づかずして果てしない暗闇に覆われる

自然是永遠に光のある世界であるかのような錯覚を与えたが、人は気づかないうちに暗闇のみの世界となってしまっていると詩人は言う。ひとの想像力は人類についての認識を確かに深くするが、それによって、人は救済されることはない。片や自然については感覚による認識の力で、人は大地の恵みと再生を知ることができるが、それは人の魂の救済とは無関係であった。

ここに至り、自然と人との違いはより明らかにされる。まず、自然是春がめぐれば再生をするが、ひとは死すべき運命であり、そのままではもとの塵に戻るだけとなる。しかしながら、自然と人とは等しく被造物であったとしても、その創造と直後の墮落の歴史において決定的に異なるのである。創造において、「人は不滅の永遠性」が与えられていたということである。第20連で詩人ははっきりと自然と決別する。人より美も力も長らえる命を持つゆえに自然を讃えることに対し、また人より大きく力強いゆえに自然の中に誕生する事を望むだろうかと自問し、両方にはっきりと否と言う。自然にはめぐって来る春の再生はあるが、神による再生がなければいずれの日にか死滅する運命なのである。自然と決別し、墮落の暗闇を自覚したとき、詩人はそこで回心体

験をする。ある意味で、生まれ変わり、確信に達する。

But man was made for endless immortality (20)

しかし、人は不滅の永遠性のために、造られた

一瞬のひらめきのごとく、詩人は自己の永遠性について悟ると、そこからは自然を見る見方は一変する。第21連で川の岸辺に座り、その流れについて瞑想する詩人にとって、川は自然の事象であると同時に、それは既に祝福された人の生の表象、エンブレムとなっている。大洋へ向かう川の流れは約束された天の国へ向かう詩人の姿であり、流れを阻む障害や曲がり角は人生の苦難を意味する。障害がむしろ川の流れに勢いをつけている様を観察することに示されているのは、人生の苦難で人は試されること、そこで神ととの真理に至ることが出来るということである。川のリズミカルな流れ、大きな石を乗り越えて、なお勢いを増す水のイメージ豊かな描写は、回心体験による心軽やかな詩人の心の流れと、見事に一致する。詩人は川に呼びかける。

O happy Flood, quoth I, that holds thy race
Till thou arrive at thy beloved place,
Nor is it rocks or shoals that can obstruct thy pace. (22)

“あ、楽しかりき、奔流よ”私は言った“自分の行路を守り、最愛の場所までたどり着くとは、岩も浅瀬も汝の歩みを阻むことあたはず”水中にすむ魚は、川の流れよりもさらに、自然の事象としての観察を越えて、創造されたことも知らない無意識の自然そのものの寓意となっている。変化は詩人そのものにも表れ、卑しき生き物たちほどにも歌が歌えなかった彼女はナイチンゲール(Philomel)と自分を重ね合わせる。突如届く美しい鳥の歌声に心は高揚し、自分は「見ること」すなわち想像によって光景を描くことよりも、「聞くこと」すなわち神を讃える調べの麗しい音楽を味わうことに優れていると述べて、この鳥との一体感を求める。¹²

And wisht me wings with her a while to take my flight. (26)

翼をつけてかの鳥と共に飛ぶことを願う

神を讃える歌を歌うのが詩そのものの目指すところなら、詩人はここでその準備に達したことになる。第26連からの3連は、ギリシャ神話上のフィロメルの悲しい運命とは違い、陽気でにぎやかで、純真、無垢な小鳥として、鮮やかにその光景は描かれてある。ナイチンゲールは死すべき運命の被造物としてではなく、苦悩と障害を乗り越え祝福された詩人の、高らかに神を讃える歌を歌うその心象、および、詩人としての歌い手であることの自覚、また小鳥の翼に意味が込められた靈感を求める詩人の心の風景などを表わすものとして描かれてある。

第29連から始まる最後の5連は、再び人の魂の救済についてとその確認である。人は確かに認識においても、力においても弱々しい。またその他の被造物と異なり、さまざまな苦しみを入れる器であるが、詩人が人をふたつのカテゴリーに分けて述べた所は特に興味深い。ひとつは、苦しみに会っても神の浄化を受けようとしない者、片や苦しみに遭遇してこの世の空しさを知り神

の救済を希望する選ばれた者とである。前者と後者の違いは、前者はこの世での罪と悲しみという「風雨にさらされ、苦痛に難破した船」であるに対し、後者はこの世の快樂を味わい、楽しむ者。そして苦難に遭遇することによって、自分の愚かさに気づく者である。

So he that faileth [saileth?] in this world of pleasure,
 Feeding on sweets, that never bit of th' sowne
 That's full of friends, of honour and of treasure,
 Fond fool, he takes this earth ev'n for Heav'n's bower.
 But sad affliction comes & makes him see
 Here's neither honour, wealth, or safety;
 Only above is found all with security. (32)

この世の快樂の世界を航海する者は
 酸っぱさのない甘い食物を口にし

多くの友人、名誉、宝に満たされ
 愚かなる者、彼はこの世を天のあずまやと見まがう
 でも、悲しい苦悩が訪れて解らせる

ここには名誉も、富も安らぎもなく

天にのみ確かにそれらがあることを

第31連は幸福な船乗りを例えとして、32連とほぼ同様の趣旨が語られる。これはまた、“Contemplations”全体の流れとも同型である。崩壊するもの、死すべきものであるこの世の営みを、その事実を認識することなく傲慢のそりを免れない生き方とその愚かさ、そして、苦難に遭遇し初めて死すべきものと永遠性についての自覚に至るという流れにおいて、大小は相互に呼応している。

最終の33連は「時」に呼びかけることで、この世のすべてが死すべき運命であること、そして、人のみは「默示録」で約束された永遠性が与えられていることの対比が力強く示されて、この作品は終る。

O Time the fatal wrack of mortal things,
 That draws oblivions curtains over kings,
 Their sumptuous monuments, men know them not,
 Their names without a Record are forgot,

Their parts, their ports, their pomp's all laid in th' dust

Nor wit nor gold, nor buildings scape times rust;

But he whose name is grav'd in the white stone

Shall last and shine when all of these are gone. (33)

あ、時よ、死すべきものの決定的なる破滅

王たちの頭上に忘却のカーテンを引くもの

彼らの高価な記念碑を人々は知らない

記録に残さねば彼らの名も忘れられる

彼らの領地、城門、壯麗さはすべて塵の下に置かれ

知識も黄金も建物も、時の腐食を逃れない

しかし、白き石にその名が刻まれた者は
すべてが消え去っても、長らえ、輝かん

全編を通じてアン・ブラッドストリートの中心的テーマは「死すべきもの」(mortality)と「永遠の命」(immortality)の問題であることは明らかとなった。当初の問題であったブラッドストリートの自然へのアプローチであるが、それはこの二つの観念をそれぞれに説明し、表現するために、ある時は「死すべきもの」とし、ある時は「永遠の命」を証するためのエンブレムとして現われる。まず秋の森の紅葉の風景の美しさを讃える詩人の視点は木の高さまでの周囲である。そこから視点を上げ、堂々たる樺の木へと移行し、太陽と、ある秩序を持った自然全体を見渡す構造となっている。ブラッドストリートはそこに死と再生の連続と時の規則正しいサイクル、命あるものにとっての生の喜びも見いだす。その秩序の中心である太陽への賛歌は、ピューリタンの感性では許されないと思われるほど非常に自由で、詩人の魂の発露となっている。このことはアン・ブラッドストリートの生き方と無縁ではなく、この世を充分に生きること、味わうことは、決してピューリタンの教えに矛盾する事ではないとの、彼女の言明と解釈できる。

しかし、詩人としてのブラッドストリートの最終の役割は、神を讃えることであって、美しい自然を賛美する事ではない。その役割を果たすために、詩人は自らを謙虚にする。天地創造と、墮落と救済を受け入れることにより、詩人の心が体験する神の恩寵によって、自然是二つの姿をもって詩人の前にたち現われる。そのひとつが、「死すべきもの」としての自然の認識であり、またひとつは、「永遠の命」のエンブレムとしての自然である。「永遠の命」への喜びを抱いた人の人生をアン・ブラッドストリートは川の流れる様子という絵で表わし、また神の賛歌を歌う詩人としての自己を、ナイチンゲールの翼と歌声に表わす。すなわち詩人としての自分を高らかに宣言しているのである。

前半で観察され享受された自然と、後半のエンブレムとしての自然はそれぞれ、生命感に溢れ、釣合の取れたものになっている。両者を繋ぐ所に、「愚かな私」と、「人の存在は墮落の暗闇にある」の認識がある。瞑想詩の目的に沿えば、前者の自然は否定されるべきものとして想起され、呈示されたことになり、当然「自然を歌った詩」としての“Contemplations”もまた否定されることになろう。しかしながら、「愚かな私」をアン・ブラッドストリートは否定しているだろうかというと、必ずしもそうではないように思えるのだ。ここに「自然を歌った詩」としての評価の可能性があると思われる。第31連に出てくる船乗りは、「風や潮を我が内にし」「海の偉大な主人のごとく」振舞う船乗りだからこそ、逆風を知り、港を求めるのであるからだ。詩人としてのアン・ブラッドストリートもまた同様である。アン・ブラッドストリートのこの世での生活感覚は、あるいはこの「愚かさ」の肯定ではなかろうか。豊かな自然の賛歌、愚かさの自覚、死すべきものとしての自然、人の墮落と神による救済、神への賛歌、そして詩人としての謙虚な、しかも自信にあふれた歌、すべて詩人の魂の伝記と読むことができる。“Contemplations”は詩人の魂のあり方を映してバランスがとれた作品である。アン・ブラッドストリートは、自然の賛歌を目指した詩人ではもちろんかったが、自然をそのまま賛歌する言葉を持った詩人であった、と言える。

注

- 1) Joseph R. McElrath, Jr. and Allan P. Robb eds., *The Complete Works of Ann Bradstreet* (Boston: Twayne Publishers, 1981), p. 216.

- 2) Alvin H. Rosenfeld, "Ann Bradstreet's 'Contemplations': Patterns of Form and Meaning," in Pattie Cowell and Ann Stanford, eds., *Critical Essays on Ann Bradstreet*, (Boston: G. K. Hall & Co., 1983), pp. 124-25.
- 3) *The Complete Works*, p. 167. 引用はこのテキストに依った。連の番号は括弧内に示した。
- 4) Rosenfeld, p. 129.
- 5) 「教義と感情の間の葛藤」については, Ann Stanford, "Ann Bradstreet: Dogmatist and Rebel," New England Quarterly XXXIX (Sept., 1966), collected in *Critical Essays on Ann Bradstreet*, pp. 76-88 を参照。この議論は Stanford から始まった。
- 6) Helen Saltman, "'Contemplations': Ann Bradstreet's Spiritual Autobiography," in *Critical Essays*, pp. 226-237.
- 7) Kenneth A. Requa, "Ann Bradstreet's Use of DuBartas in 'Contemplations,'" in *Critical Essays*, pp. 145-49.
- 8) *The Complete Works*, p. 200.
- 9) Ann Stanford, "Ann Bradstreet as a Meditative Writer," in *Critical Essays*, p. 89-91.
- 10) Stanford, p. 90.
- 11) Requa, p. 148.
- 12) Saltman, p. 234 参照。ナイチングールと詩編のダビデとの関係について論じてある。

著者一覧

T. Hanajima	Microstructural Change of Weld Interface in TMA Friction Weld during Heat Treatment	Journal of The Society of Materials Science, Japan, Vol. 31, No. 341, pp. 121-125
A. Fujii	Influence of silicon in aluminum on the mechanical properties of titanium-aluminum intermetallic joints	Journal of Materials Science, And its Applications, No. 145-148
K. Amemiya	Friction Stir Welding of Ti-Al Intermetallic Compounds	Journal of Materials Science, And its Applications, No. 145-148
T. H. North	Friction Stir Welding of Ti-Al Intermetallic Compounds	Journal of Materials Science, And its Applications, No. 145-148
M. Kubayashi	Expansion of Ultrasonic Wave Velocity Changes Under Plastic Deformation Using Crenelation Orientation Distribution Function	Transactions of the Japan Society of Mechanical Engineers, Vol. 53, No. 500, pp. 221-226
N. Shindou	Effect of Ultrasonic Wave Velocity Changes on the Surface Topography of Grinding Wheel	Transactions of the Japan Society of Mechanical Engineers, Vol. 53, No. 500, pp. 221-226
Y. Ito	Effect of Ultrasonic Wave Velocity Changes on the Surface Topography of Grinding Wheel	Transactions of the Japan Society of Mechanical Engineers, Vol. 53, No. 500, pp. 221-226
M. Potamianos	Application of Thermal Spraying Process to Development of New Metal Bond Grinding Wheel (Part 2) Effect of Bonding Materials on Properties of Grinding Wheel	Journal of High Temperature Society, Vol. 10, no. 183-184
M. Takeuchi	Effect of ultrasonic wave velocity changes on the surface topography of grinding wheel	Journal of High Temperature Society, Vol. 10, no. 183-184
J. Tanaka	Effect of bonding materials on properties of grinding wheel	Journal of High Temperature Society, Vol. 10, no. 183-184
K. Narita	Effect of ultrasonic wave velocity changes on the surface topography of grinding wheel	Journal of High Temperature Society, Vol. 10, no. 183-184
A. Ohnishi	Effect of ultrasonic wave velocity changes on the surface topography of grinding wheel	Journal of High Temperature Society, Vol. 10, no. 183-184
J. Tanaka	Effect of surface topography of metal bond diamond wheel utilizing three different diamond products	Journal of Materials Processing & Manufacturing, Design, Research and Application, Vol. 25, no. 10, pp. 1719-1727
J. Kikuyama	Thermal Aspects in High-speed Machining of Advanced Materials	Journal of Materials Processing & Manufacturing, Design, Research and Application, Vol. 25, no. 10, pp. 1719-1727
A. Kubo	Advanced Materials	Journal of Materials Processing & Manufacturing, Design, Research and Application, Vol. 25, no. 10, pp. 1719-1727
K. Matsunawa	Effect of ultrasonic wave velocity changes on the surface topography of grinding wheel	Journal of Materials Processing & Manufacturing, Design, Research and Application, Vol. 25, no. 10, pp. 1719-1727
K. Matsunawa	Constitution Analysis of Machinability of Iron and Cr-Ni and Mn-B Structural Steels	International Conference on PRECISION ENGINEERING '95 and ICMT'95, pp. 105-108
H. Onbara	Constitution Analysis of Machinability of Iron and Cr-Ni and Mn-B Structural Steels	International Conference on PRECISION ENGINEERING '95 and ICMT'95, pp. 105-108
T. H. C. Childs	Constitution Analysis of Machinability of Iron and Cr-Ni and Mn-B Structural Steels	International Conference on PRECISION ENGINEERING '95 and ICMT'95, pp. 105-108
J. Kikuyama	Constitution Analysis of Machinability of Iron and Cr-Ni and Mn-B Structural Steels	International Conference on PRECISION ENGINEERING '95 and ICMT'95, pp. 105-108